奥美濃・飛騨の焼畑 (2)

白川村の焼畑農業

新　谷　一　男

1．はじめに

岐阜・石川・福井の県境に位置する両白山地は早くから焼畑卓越地域として知られていた。なかでも白山の東西両山麓はその中心地区で，岐阜県側では，一般に白川郷といわれた荘川・白川両村がその地域にあたる。

白川郷をはじめ飛騨地方では焼畑を「ナギ」とか「ナギ畑」と呼び，焼畑耕作をすることを「ナギをする」と呼んでいた。

1987年に白川村の焼畑習俗を調査する機会があり，焼畑の分布・方法・使用農具・栽培作物などについて聞き取りを中心にして調べた。ここでは白川村の焼畑の分布と方法について報告したい。

2．白川村の概観

岐阜県大野郡白川村は県の北西部にあって，面積は358．45㎢で県下市町村中，第3位を占める大村である(図1)。村域のほとんどは山岳地で，西部には白山を主峰とする標高2,000m前後の両白山地が連なり，東部には標高1,500m前後の諸山地が並んでいる。両山地の中央部を，庄川が南から北に深い谷を刻んで流れ，平地は流域にみられる狭い谷底平野に限られている。

ここは日本でも代表的な豪雪地であり，最深積雪量は年間2mにもおよぶ。多い時は4m近くにもなり，昭和56年の豪雪時には4.5mを記録している。積雪期間も長く，11月中旬から降りはじめた雪は12月になると根雪となり3月いっぱいは残っている。

集落は，庄川の本・支流にそって散在する小規模な河岸段丘面や氾濫原に分布している。集落数は近年まで23あったが，現在は，相次ぐダム建設による水没・集団離村などによって15に減少している。集落は上流側から中切，大郷，山家の3地区に分けられる。村の政治・経済の中心は鳩谷・荻町のある大郷地区にある。村内最大の平地もここにあり，水田が多く開かれている。

人口は第二次大戦前は3,000～3,600人で

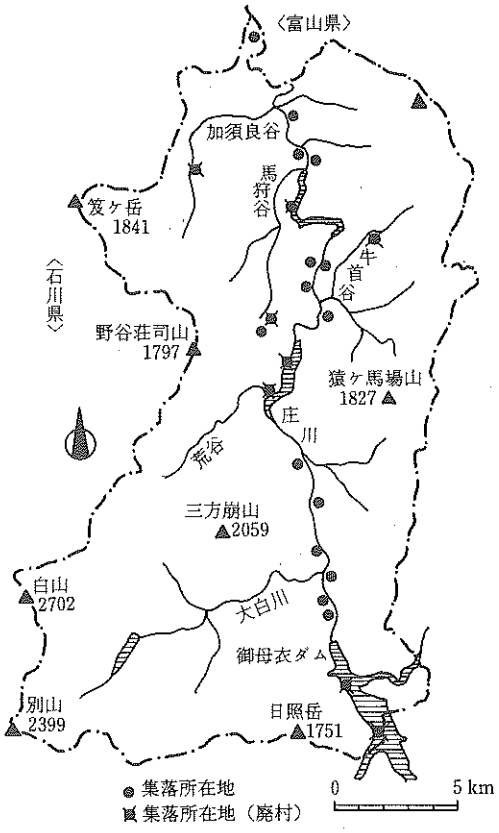

図1　白川村概要図

あったが，御母衣ダム建設時には1万人近い人口を擁していたこともあった。その後は減少を続けているが，昭和50～55年間の減少率が5.9%，昭和55～61年の減少率は3.8%となって減少の度合は鈍化してきている。昭和61年の人口は2,052人で，青年人口の極端に少ない人口構成を示している。

白川村と他地区を結ぶ交通路は庄川ぞいに通る白川街道が中心であった。この道は，かつては各所に「歩危路」や「籠の渡し」の続く道で，往来にはずい分難儀をした道であった。なかでも福島歩危・平瀬歩危・下田歩危はよく知られた歩危で，福島歩危について「斐太後風土記」[1]は，「岩山の絶壁を斫割て路を作れり。郷中にも，国内にも，比類なき険難の歩危路にて，鬚摺・睾丸縮等の名に負ふ難所あり」と記し，蟹の横ばいのように崖に顔や胸を向けてへばりつくようにして通ったのである。

第2次大戦後庄川沿いのこの街道を母体にして道路の改修工事が進められた。昭和22年に国道に昇格し，道路の拡幅・舗装・スノーシェッドの設置などの諸工事がなされて交通の便が良くなった。雪崩危険地の多い富山県境に近い山家地区は，近年まで冬季になると交通が途絶する「陸の孤島」であったが，現在は，ここをトンネルと橋で結んで冬季でも安全に通行できるようになっている。

交通事情の改善や高度経済成長後の「ふるさとブーム」の到来が観光客を増大させ，最近では，年間50万人もの人々が訪れる村となり，白川村は秘境の村，合掌造りの民家のある村として全国的に名が知られている。合掌造り民家の集中する荻町は，昭和51年に農村集落の伝統的建造物群保存地区として，全国にさきがけて国の選定を受けている。また，昭和52年に供用を開始した白山スーパー林道は白山国立公園を東西に横断して白川村と石川県を結ぶ山岳観光道路であるが，利用者が多い。

2．焼畑の盛衰[2]

白川村の焼畑農業は古くから行われていたようであるが，記録にみられるのは近世に入ってからで，元禄8年（1695）の検地の記録が最初と思われる。表1によってみよう。

a）初期（元禄記）

元禄7年5月に開始された検地は翌年に完了している。この時の検地水帳には田・畑・屋敷地などとともに焼畑面積の記載がみられる。

焼畑面積が記載されているのは，村内23集落のうち15集落で，29町7反2畝の焼畑が開かれていた。焼畑面積の最も大きい集落は長瀬で7町7反7畝あり，以下飯島・尾神・木谷などの集落が続いている。焼畑率でみると尾神の60%を最高に有家ケ原・内ケ戸・長瀬と続き，耕地の半分近くが焼畑であった。焼畑率は村内南部の中切地区や北部の山家地区に高く，比較的平坦地の多い中央部の大郷地区は低い割合を示している。

この時期の焼畑1筆あたりの面積は6畝12歩で，居宅に比較的近い田畑の外縁部に分布していた。焼畑は見取り場として記録されていた。

b）拡大期（享保～明治初期）

元禄期以降の1700年代～1800年代半ばにかけて，各集落では焼畑の拡張がみられた。

安永3年（1774）の新田検地帳によれば，元禄期に比べ一部の集落で減少しているところがあるものの，焼畑面積は全体では47町6反1畝となり，著しく増大している。焼畑1筆あたりの面積も8畝23歩と拡大し，大規模化が進んでいる。焼畑の開発は，居宅からより遠隔地で行われるようになった。

明治初年の焼畑面積の記録は「斐太後風土記」にみられる。これは明治3年（1870）飛騨国内の各村々からの報告をもとに編纂されたものである。これによると，焼畑面積は109町1反7畝で，安永検地の時に比べると2倍強の増大であり，1戸あたりの焼畑面積は4反2畝であった。

c）全盛期（明治中期～後期）

明治21年（1888）の土地台帳に記載された焼畑面積は605町7反6畝で，明治3年の約6倍，安永3年に比べれば約13倍となり，爆発的な増大をみている。

焼畑面積の最大の集落は加須良で95町4反

表1　白川村の集落別焼畑状況

集落	元録禄7年(イ) 焼畑面積	元録禄7年(イ) 焼畑率	明治3年(ロ) 焼畑面積	明治3年(ロ) 戸数	明治3年(ロ) 1戸あたり焼畑の面積	明治21年(ハ) 焼畑面積	明治21年(ハ) 1戸あたり焼畑の面積	一戸あたり焼畑の面積指数(対明治3年)
	畝	%	畝		畝	畝	畝	
尾神	473	60.2	623	6	104	944	157	151
福島	58	37.4	193	2	97	537	269	269
牧	75	36.6	135	2	68	503	252	371
長瀬	777	48.7	960	13	74	3,000	231	312
御母衣	130	33.5	384	4	96	658	165	172
平瀬	—	—	742	7	106	4,416	631	595
木谷	369	33.5	695	7	99	1,829	261	264
保木脇	7	4.5	450	6	75	3,713	619	825
野谷	27	27.0	150	3	50	361	120	240
大牧	25	3.1	600	12	50	1,170	98	196
荻町	181	9.7	750	80	9	—	—	—
島	8	7.0	300	6	50	1,781	297	594
牛首	—	—	1,080	5	216	8,329	1,666	771
鳩谷	—	—	307	18	17	89	5	29
飯島	543	19.7	1,629	49	33	5,296	108	327
大窪	17	16.3	300	2	150	7,917	3,959	264
馬狩	—	—	300	8	38	848	42	111
内ヶ戸	90	52.9	268	3	89	366	40	45
加須良	—	—	300	6	50	9,545	1,590	3,180
椿原	—	—	343	5	69	2,978	596	864
有家原	192	56.5	192	3	64	1,178	393	614
芦倉	—	—	123	5	25	4,619	924	3,696
小白川	—	—	93	9	10	499	55	550
計	2,972		10,917	261	42	60,576	232	552

注：焼畑率＝焼畑面積/水田面積＋畑面積＋焼畑面積
(イ)「岐阜県飛騨国大野郡史・中巻」より作成
(ロ)(ハ)「焼畑村落の展開過程に関する歴史地理学的研究－飛騨白川郷を例として－」溝口常俊より
—不明

5畝，以下牛首83町2反9畝，大窪79町1反7畝と続き，焼畑面積が10町歩以上の集落は13集落にも及んでいる。1戸あたりの焼畑面積も2町3反2畝と明治3年の5.5倍に増えて，焼畑村落といった性格が一段と強まっている。

なかでも富山県境に近い峡隘部の山家地区では，1戸あたりの焼畑面積が大きく，明治3年に比べての増大率も高い。他に大窪や牛首のように標高が高く平坦地の乏しい所では焼畑への依存度が高く，1戸あたりの焼畑面積も群を抜いて多い。大窪では1戸あたり40町歩近い焼畑を開いていた。

焼畑は集落から遠い山間地に分散して開かれていた。写真1は白川村役場に保管されている「大野郡白川村荻町絵図(明治21年作成成と推定)」の一部である。地番の記載とともに「焼畑」の文字がみえているが，ここは荻町の集落から4 kmほど離れているが，遠隔地に焼畑が開かれた例である。

d）衰退期（大正期以降）

焼畑は，明治後期から衰退しはじめ，昭和期に入るとその傾向は一段と進んだ。とくに昭和40年代を境に急速に減少し，その後は，一部を除き焼畑はみられなくなった。即ち，わずか，保木脇で昭和59～60年頃まで，自家用のカブ栽培のための焼畑が集落近くの斜面でなされていたのと，昭和62年に飯島で，ワサビ田造成の前段階として焼畑を行いカブの栽培を行った例が

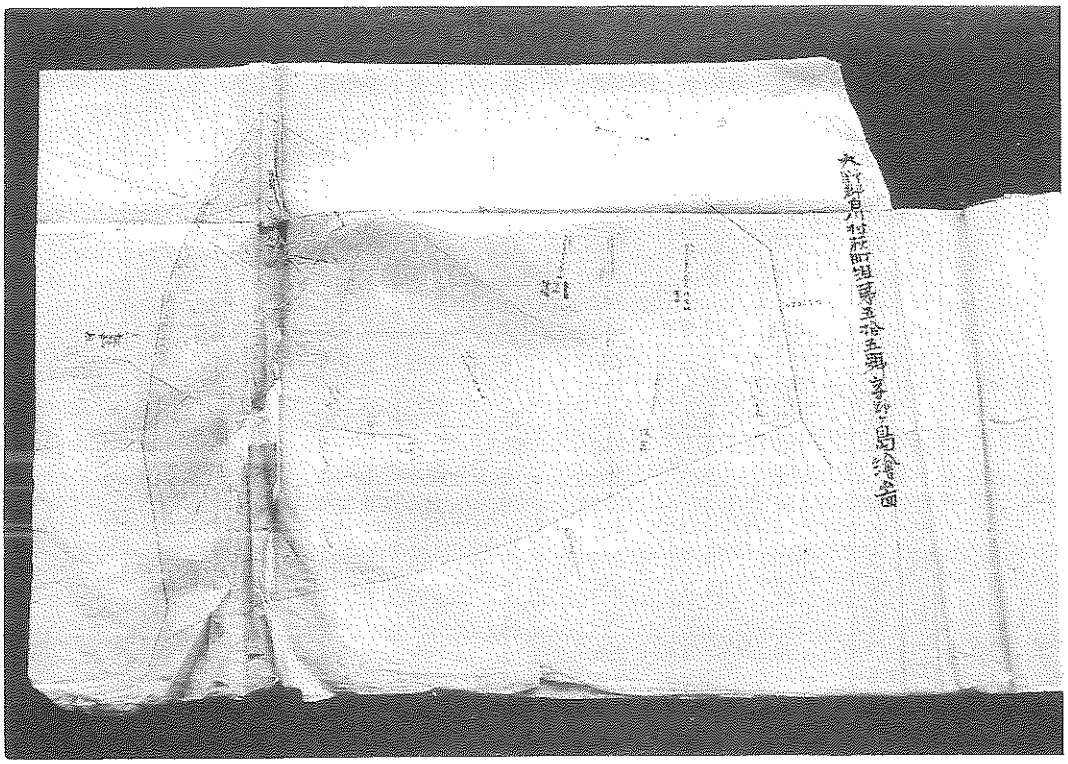

写真１　焼畑の文字のみられる字絵図

あるのみである。

衰退の最大の理由は，交通の便がよくなって木材に価値がでてきたために，むやみに樹木の伐採をしなくなったことや，食料の潤沢といったことが考えられる。また，明治30年に施行された森林法によって，火入れが制限されたり保安林が設定されたことも，焼畑の減少に影響を与えていると思われる。白川村では，明治末期から大正の初めにかけて人口流出が進み，家族人員の減少をもたらしたが，家族労働に頼る焼畑は，この面からも減少が避けられなかったようである。

なお，焼畑の跡地に植林がすすむようになったのはこの頃からである。

4．焼畑の分布と方法

a）全盛期における焼畑分布[3)]

図２に示したように焼畑の多くは，庄川沿いに分布しているが，庄川の支流である馬狩谷の斜面にその集中地区がみられ，とくに大窪では大規模な焼畑が多い。加須良や牛首のように庄川の本流から離れた山間地の村落にも大規模な焼畑がみられる。前述のように加須良・牛首・大窪は焼畑面積の大きな集落であり，この３集落で村内焼畑の43％を占めている。１戸あたり焼畑面積についてみても，３集落は他の集落に比べて格段に多い。村内平均が2.32町であるのに大窪は39.59町，牛首16.66町，加須良15.9町もあり，いずれも，焼畑に大きく依存していた。

これに対して，平地の多い鳩谷では焼畑面積，１戸あたりの焼畑面積ともに村内で最小である。焼畑は平地部に近いものより山間地のものの方が大規模であるという傾向がみられる。

集落からの距離をみると，２km圏内にあるものが全体の約２／３をしめているが，遠いものでも５km圏内に収まっている。集落は一般に，それぞれの大字内で最も低い所に位置して

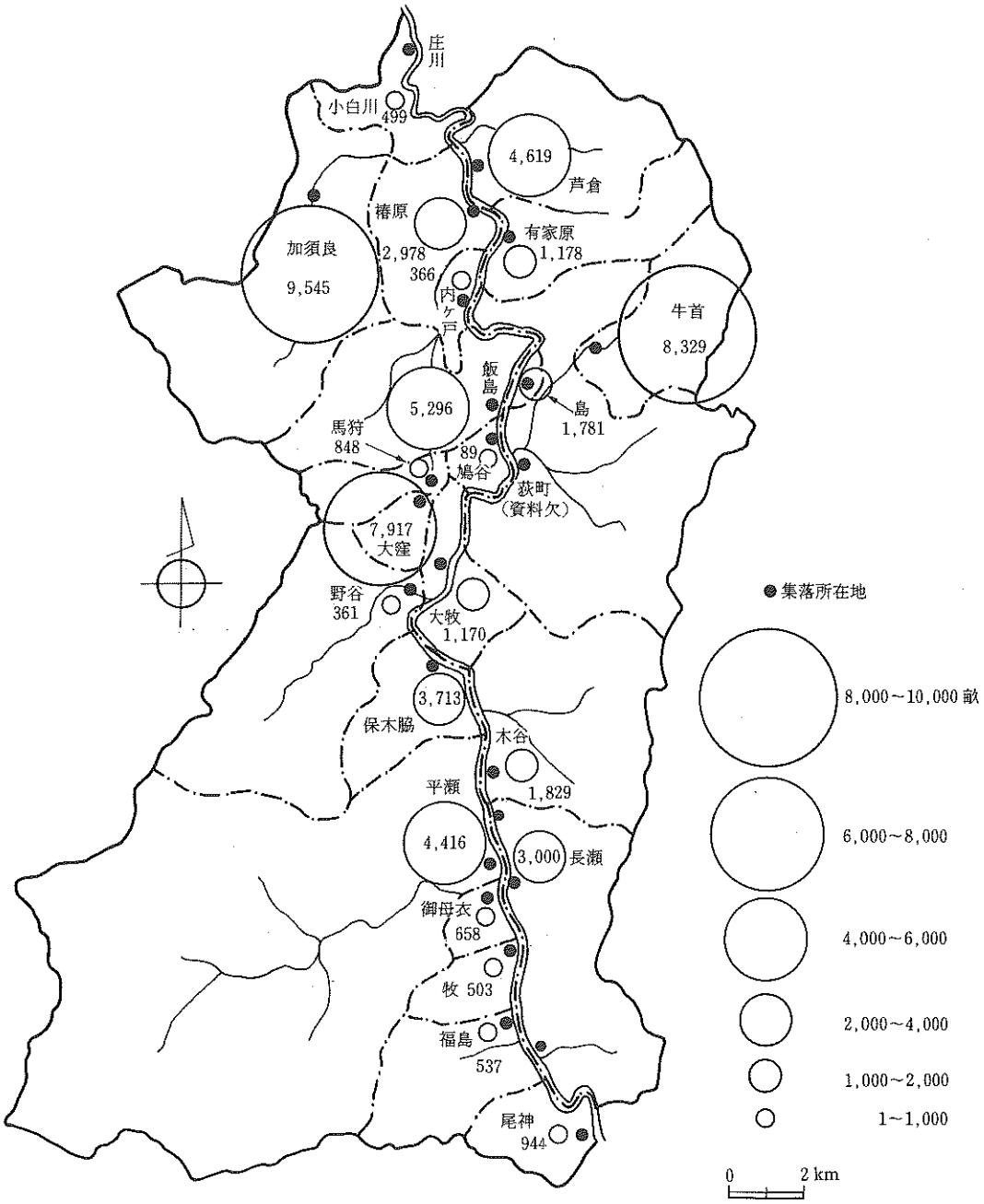

図2　白川村の焼畑分布（明治21年）

「焼畑村落の展開過程に関する歴史地理学的研究――飛騨白川郷を例として――」溝口常俊，人文地理 38-2，14頁の資料により筆者作成

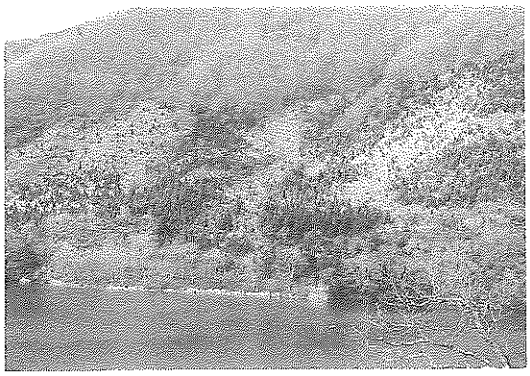

写真２　焼畑跡地の草地と杉林
1987年11月23日，筆者撮影

いるので，高い山地に開かれている焼畑への往復はかなり辛いものであった。集落と焼畑の高度差は，中切地区で300～400ｍあり，芦倉では950ｍにも及ぶものがあった。最高所の焼畑は牛首のもので，1450ｍ地点にあった。

写真２は荻町集落より庄川右岸の下流側４kmにある荻町字野ケ島の山地斜面に開かれた焼畑跡地である。このように焼畑は山地中腹部の斜面に開かれているものが多いが，尾根筋の緩傾斜地にもある。斜面の傾斜は20～30度にあるものが多いが，なかには30～40度の急斜面に開かれたものが山家地区を中心に若干みられた。

ｂ）焼畑の方法

焼畑開始の届・許可　白川村の焼畑は個人の持ち山でなされるものもあったが，組（近世の藩政村）保有地に開かれるものが多かった。福島・平瀬・島・牛首・有家原・芦倉地区の焼畑はすべて組保有地にあり，保木脇・野谷・大牧・鳩谷・馬狩・内ケ島・椿原・小白川では50％以上の焼畑が組保有地にあった。

組保有地での山林利用・焼畑開拓は村人各人が自由に使っていたというが[4]，組保有地といってもそれぞれの持ち分（使用する場所）があるので，焼畑を実施する時はそこに権利をもつ組のものに「おりや（自分は），ここでナギ畑やらしてもらいたいで，頼むぞ」（平瀬・坂次氏）と口頭で告げ，さらに区長なりその地区のまとめ役の許可をもらってから行っている。

昭和62年に飯島の宮脇氏がワサビ田造成の前段階として行った焼畑の時は，火入れの時に役場へ連絡をしてから実施している。

場所の選定　水田や普通畑に利用されにくい土地を開拓してなされる焼畑は，「普通は20度くらいの急勾配地でもやった」（萩町・宮脇氏）というように山の斜面をよく利用した。その場合でも地形的には落ち葉などのたまりやすい凹地などを選んでいる。

「榛の木が生えているとこは肥えとるが，松や楢が生えとるとこは痩せとる」（萩町・大洞氏）といわれるように榛の木の生えている所が焼畑適地として選ばれていた。榛の木はマメ科植物と同じように根に根瘤を生じ，空気中の窒素を固定する肥料木として役立つ樹木として知られている。

伐採と火入れの準備　伐採は春に行われる場合と夏に行われる場合などがあり，萩町では前者をソバナギ，後者をカブナギとよんでいる。

春の場合は「田植えを済ませてから田の草取りをするまでの間に，山へ行って伐採し，焼畑の準備をする」（鳩谷・中脇氏）というように農作業の手順が決まっていたようである。夏の場合は８～９月に伐採された。

伐採作業は「ノコとカマで５～６日かけてやる」（飯島・宮脇氏）仕事であり，写真３．４でみるような道具を使用して行った。樹木はできるだけ低いところで切り，小さな柴などは両刃で刃の厚い柴刈りガマで切った。草などは長い柄のついた草刈りガマでなぎ払うようにして切った。伐採された樹木のうち太いものは薪用として適当な大きさに切って家へ運んだ。細い木やホエとよばれる木々の枝も燃えやすいように長さ１ｍくらいに細かく切って地面に並べて乾かされた。

伐採と同時に「ヒミチ（火道？）」とよばれる延焼防止帯が作られる。ヒミチは焼畑と周囲の生木地との間に設けられるもので，その幅はおよそ１～２ｍである。斜面の程度や焼畑面積の大きさによっても違いはあるが，斜面では標高の高いほうのヒミチの幅は広く，低いほうはやや狭くするのが普通であった。ヒミチには伐採

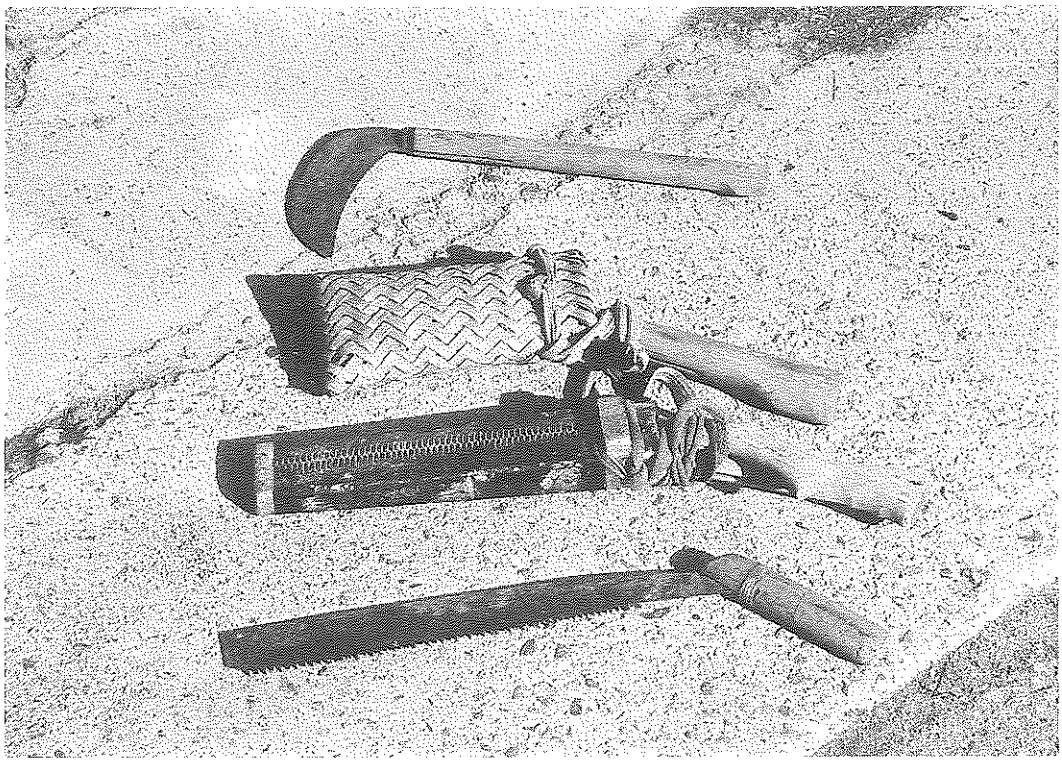

写真3　焼畑の用具類
1987年12月26日，筆者撮影
焼畑造成時に使用した道具，上方より柴刈りガマ，トンベナタ，手ノコ〈飯島：宮脇氏蔵〉

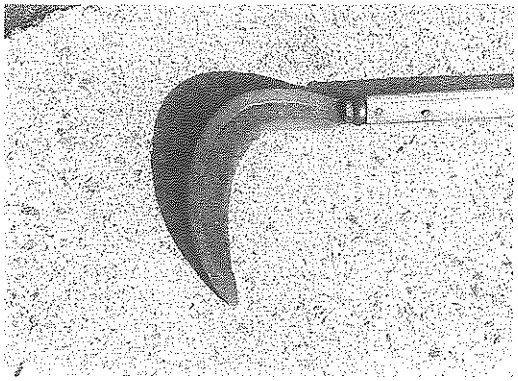

写真4　草刈り鎌
1987年.12月26日　筆者撮影
下草等を刈る草刈りガマの刃先〈飯島：宮脇氏蔵〉

した樹木はもちろん木の葉なども置かないようにした。

ヒイレ（火入れ）　伐採後15日くらいすると火入れをする。天候が悪く雨が降ったりすると20日以上乾かすこともある。火入れは天気のよい日を待って行うことが多いので，組内一斉の火入れとなることも多く，「そんな時は天が真っ黒になって見えんがじゃ」（平瀬・坂次氏）という状況であった。また，「天気が良すぎると火が見えなくなって，火の勢いや飛び火がわからなくなって危ないので，火入れはしなかった」（飯島・宮脇氏）という。

焼畑は家族で行うのが普通だったが，火入れのときに人が足りないと思った場合は，組内の人に応援を頼むこともあった。その場合，日当を払うようなことはせず，「おみたちゃ（お前達が）焼くときゃよぼってくろ（呼んでくれ）」（平瀬・坂次氏）ということで労働力の相互交換がなされていた。

火入れの前日か当日の午前中に，ヒミチを地肌が見えるようになるまでホウキで掃いた。ホウキは家庭で使っているものは柔らかくて使えないので，近くにある小枝・柴などを利用して

写真5　ヒミチをはくホウキ
1987年9月27日，筆者撮影

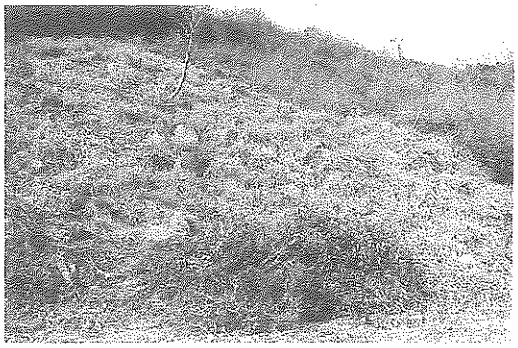

写真6　石の多い焼畑跡地
1987年11月22日，筆者撮影

ホウキを作って使用した。写真5はヒミチをはくホウキであるが，材料を集めて完成するまで7～8分であった。掃き終ると焼畑へ放り込んで一緒に燃やしてしまった。

火入れは朝からすることは少なく，午後早くから始めることが多かった。午後の4～6時には大体終っていた。火入れは斜面の場合，標高の高い方から火をつける。火が途中まで下りてきたら左右両側からも火をつける。燃え方が不十分な時は途中からも火をつけた。標高の低い方から火をつけると，火の勢いが強くなって周囲い飛び火して山火事になったり，焼畑地内でも表面部分だけが燃えるだけで，十分に燃え切らないからである。それでもなお燃え残りがでるが，燃え残りは次の日にでかけて行き，集めて焼いた。その時は「素手で手を真っ黒にしながら集めた」（萩町・大洞氏），「トビカギで集めた」（平瀬・坂次氏）のである。「燃え残りは大きな木の切り株などのところへ集めて燃やし，木の根を少しでも枯らすようにした。また，用心のためバケツに水を汲んで置くこともした」（飯島・宮脇氏）ということである。

焼上った畑には切り株や石などが散在していたが，無理に取り除くことはしなかった。カブ栽培のときには，むしろ石の周りのものの方が味が良いといって残したくらいである。写真6は数年前までカブを栽培していた保木脇の焼焼跡地であるが，直経40～50 cm位の石が多く，作業の困難がしのばれる。

播種　最初の種播きは，焼き終わって4～5日たったあたりで翌日雨が降りそうだと思われる日に行った。

種子は普通の畑に播くよりも薄めに散らばるように播く。播き終るとトンガまたはネコノシタベラとよばれる小型の鍬で，表面をつつく程度に軽くチョンチョンと打つ。木の根がはってトンガがうてないところではなでるようにする。トンガは柄の長さが70～90 cm，鉄製の刃も幅9 cm前後，刃先から柄の付け根までが18 cm前後のもので，刃先が写真7のように丸み

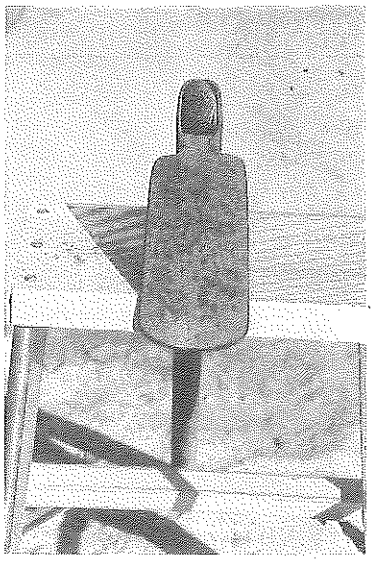

写真7　トンガの丸みをおびた刃先
1987年12月26日，筆者撮影

を帯びているのが特徴である。刃先が角ばっていると木の根などにひっかかり易いからである。

斜面の焼畑を打つ時は，標高の高いほうから打つことと，深打ちをしないことが大事である。下の方から打つとまいた種が下の方へ落ちてしまうからである。

2年目以降の種播きは4月か5月頃に行った。

主な栽培作物はヒエとアワであり，他にソバ，カブラ（カブ），大豆，小豆，カラベ（唐稗），アブラエなどが植えられていた。

除草と間引き　種を播いてから収穫するまでの間に5～6回程度見回りをして除草や間引きを行う。除草作業では雑草の除去とともに切り株から伸びるヒコバエの除去が重要な仕事であった。

焼畑では直播きのため密植状態になっているので，適当な間隔になるように間引く。アワやヒエなどでは10 cmくらいに伸びたあたりで行い，カブラの場合は十分な間隔をとらないとよく育たないので，20 cmくらいの間隔になるように間引いた。

翌年から焼畑を止める場合は除草しないことが多かった。

焼畑に肥料をやることはなかったが，昭和62年に飯島で実施された焼畑では若干の硫安をまいた例がある。

鳥獣害防除　収穫間近になる鳥獣の害を受けることが多くなる。昭和62年に実施した飯島の宮脇氏の焼畑にも野兎が昼間からやってきてカブラを食べており，人間が近づいても逃げないくらいであったという。

これら鳥獣の被害から作物を守るためにボロ衣を着せた案山子（カカシ）をたててりすることもあった。斐太後風土記[5]に「山畑の夜守」と題して写真8の図とともに次のような記述がある。「深山中の村々，小鳥郷，白川郷，川上郷の奥を始，三郡深山の村里押並べて，居村の本田畑よりは，焼畑の雑穀の作毛多ければ，初秋穂の出ずる頃より，山中に小屋を掛て，老人児等に家を預け置，村中の男女おのがじし，山畑の小屋に一人宛別れ行て，夜々守り，案山子（方言に猪の曽米と云）を立，夜もすがら鳴子（方言土宇豆久と云）をひき，猪笛を吹（桐の木を以造る火吹き竹の如し）板等を打鳴し，不断聲を揚て，猪を驚かし逃げ去らしむ。焼畑多く，小屋数も多き山にては，遠近の夜守の男女，処々にて鳴物を鳴し，互いに聲をはりあげ，呼び交す故，初秋より暮秋穀物を刈上るまでは，なかなかに，山小屋は賑ひて，村里は寂寥，夜守の者，小屋にて熟睡ぬれば，其を狙ひより，猪来て，作毛を食荒ら故，終夜聊怠らず聲をあけ，鳴物を鳴して，猪を追うことは，里の村々平田に稲のみ作る農民よりは，いたつき如何ばかりか多からむ。」

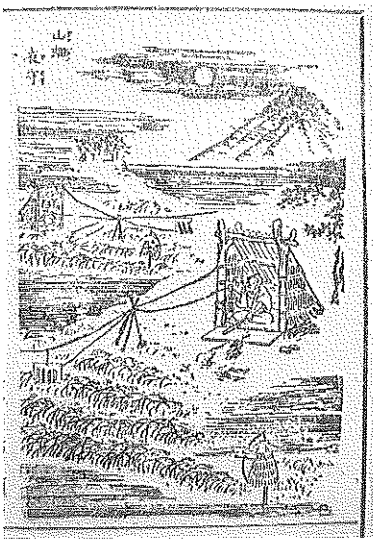

写真8　山畑夜守の図
斐太後風土記による。

収穫　ヒエやアワは穂だけをカマなどで刈り取り，カマスに詰めて運び，家で乾かした。ソバは青いうちに刈り取らないと実がこぼれてしまうので，実が黒みがかったら刈り始めた。ソバは根元から刈り取り，束ねて，近くの平地に作ったハサに掛けて乾かした。2～3日してから出かけ，焼畑で実だけを落とし，カマスに詰めて家へ運んだ。家に近い焼畑で作ったときは「束ねたソバを持参したムシロの上に穂を内側にして並べ，ムシロ毎丸めて縛り，運ぶこともあった。家では山でやったのと同じようにハ

サに掛けて乾した」（萩町・大洞氏）という。

収穫物を焼畑から家まで運ぶのは人が背負うのが普通だったが，時には牛の背を利用することもあった。

山小屋　焼畑が家から1里以上も離れているような遠隔地にあるときは，図3のような「山小屋」とよばれる小さな小屋を作ることがあり，作業時の休憩所や短期間の寝泊まりに使用されることがあった。

小屋は水の便のよい比較的平坦な土地を選んで建てられた。水の便の悪い場所に建てることもあったが，その場合の水は，近くの谷川まで降りて，水樽とよばれる1斗から2斗入る木製の樽に入れて背負って運び，使用した。

小屋は切妻型をした小さなもので，直径10cm前後の丸太を合掌状に組み，棟部分の途中に横木を渡して，ネソとよばれる弾力性のある細い木で縛って骨組みを作った。屋根部分の途中に横木を一本渡すこともあった。屋根や壁には周囲でとれる萱（カヤ）を使ったが，ときには杉の皮を剝いで囲うこともあった。出入口となる妻側にはムシロを一枚吊り下げて戸の代りとした。高さは合掌の棟部分で2m前後，床の広さは2m×2mから3m×4mくらいまでのものであった。

萩町の人達の出かけた野ヶ島に作られた山小屋では寝泊まりがされていた。出入口側に開いたコの字型の間仕切りになるように木を置いて，土間部分と腰をおろす部分との境とした。土間部分の中央に炉を設け，周囲の腰をおろす部分には柴を敷いた。出入口から一番奥のところに家から持参したボロ布団を敷いて寝床とした。「種まき，草取り，収穫のときなどに3～4日から1週間くらいずつ泊まりこんでやった。泊まるのは大抵は一人やったが，夫婦で泊まることもあったようだ」（萩町・大洞氏）という。

焼畑は1ヶ所を切り開くとそこを中心にして周囲に広げていくので，山小屋は崩壊しないかぎり何年でも使用された。

一方，飯島の人達が出かけた馬狩谷方面の焼畑に作られた山小屋は，寝泊に使用されることはなく，昼食時の休憩や収穫物の一時的置場所

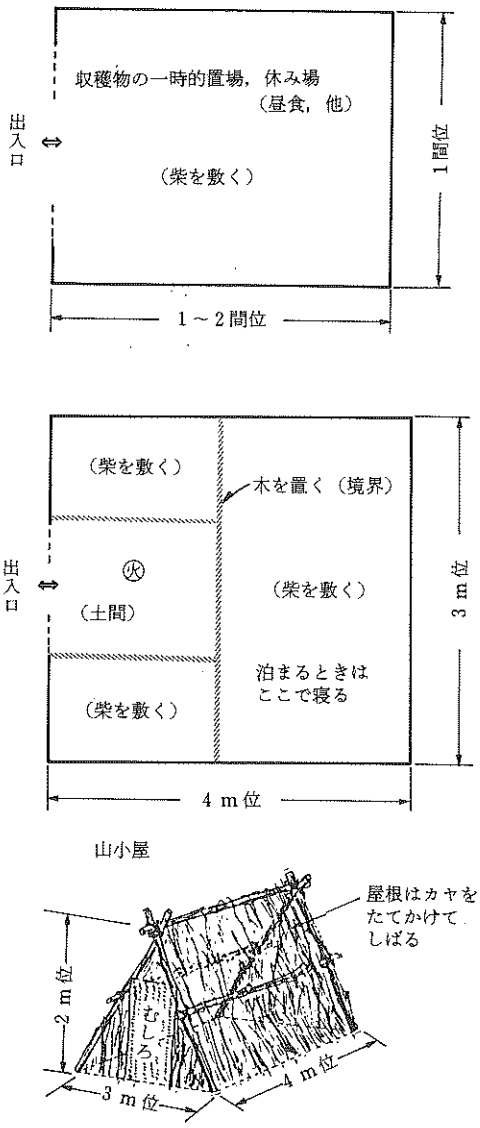

図3　山小屋平面図（上：飯島，下：萩町・野ヶ島）
萩町：大洞氏，鳩谷：中脇氏による

として使用していた。床の出入口付近に炉を設けたものや，炉を設けないで全面に柴を敷いたものなどがあった。出入口にはムシロを吊り下げていた（鳩谷・中脇氏，飯島・宮脇氏）。

5．焼畑の利用法と作物

a）焼畑の利用法

白川村の焼畑の輪作サイクルは表2のとおり

表2　焼畑の土地利用

	実施地		1年次	2年次	3年次	4年次	5年次	6年次	出所
1	御母衣	夏焼	蕎麦・蕪	粟・稗	粟・稗	薄(萱)			生態民俗学序説（野本寛一）
		春焼	粟・稗	大小豆	粟・稗	粟・稗	薄(萱)		
2	荻町	夏焼	蕎麦・蕪	小豆	薄・榛				生態民俗学序説（野本寛一）
		春焼	稗・粟	粟・稗	小豆	薄・榛			
3	荻町			稗	粟	カラベ(唐稗)	小豆	アブラエ	白川村史 809～810P
						7年次後，メバリ・榛の木を植える。			
4	荻町	カブナギ（秋焼）	カブ	粟・稗	稗・粟	アラシ(萱)	1度焼畑にした所を，何年かしてもう1度焼畑にすることは聞いたことがない。		大洞武夫（77歳）聞き取り
		ソバナギ（夏焼）	ソバ	稗・粟	粟・稗	アラシ(萱)			
5	鳩ヶ谷	秋焼	カブ	粟・稗	稗・粟	杉・桑			中脇美栄（81歳）聞き取り
		夏焼	ソバ	稗・粟	粟・稗	杉・桑			
6	飯島		ソバ	稗・粟	粟・稗	杉			宮脇治信（55歳）聞き取り
7	平瀬	夏焼	ソバ	粟・稗	稗・粟	雑木	長いところで20～30年，普通15年位で再び焼畑をした。		坂次仙蔵（91歳）聞き取り
		春焼	稗・粟	粟・稗	稗・粟・麦	雑木			
8	尾神	春焼	稗・粟	ソバ	雑木				新谷忠孝（75歳）木谷出身聞き取り

である。

4月から5月初旬にかけて伐採・火入れがなされた焼畑では，栽培期間に余裕があるため，ヒエやアワがまかれた。土用前後になされた焼畑では，萩町では，ソバナギと称し，ソバが植えられた。9月頃になされた焼畑では，萩町ではカブナギと称しカブを植えた。秋10月頃に伐採された場合はそのままで冬を越し，翌春の4～5月に雪で地面に押さえつけられていた木を越し，乾かして火入れをした。

2年目は前年と作物の種類を替えてヒエやアワをまいた。3年目にも前年と種類は替えるがヒエやアワを植えるのが多かったが，大豆，小豆，カラベ，アブラエなども植えた。

全体的にみると1年目はソバやカブを植え，2年目・3年目にヒエやアワを植えるパターンが一般的であり，3年を過ぎれば焼畑を放棄するのが普通であった。しかし，土地の肥えたところでは4～5年耕作が続けられるものもあった。

焼畑終了後放置されたところは「アラシ」といわれ，柴や雑木が自然に生えてくる。15年くらい経つと再び焼畑にされたが，土地の痩せたところでは20年～30年くらい待ってなされることもあった。場所によっては焼畑を放棄するときに萱，桑，榛の木，杉を植えることもあった。

茅葺き合掌造り民家の多いこの地方では，屋根材として萱は重要であったので，萱場作りには積極的な努力が払われていた。焼畑での輪作終了後の跡地の中を，別の萱場で刈った萱の穂を箒のように束ねて引きずって歩いたり（萩町・「焼畑民族文化論」），穂についている種子を籠に集めてまく（御母衣・前掲書）という習慣もあった[6]。

養蚕の盛んであった白川村では焼畑跡地に桑が栽培されることも多かった（木谷・坂下氏，他）。「肥えた土地で便利のええとこやといくら遠くても桑を植え，こき（摘み）に行ったもんや」（萩町・大洞氏），「夏蚕のときは，朝の2時頃に家を出て，ナギ畑へ3時か4時頃着いて桑こきをしたもんや。10時頃まではなんにも食べんと一生懸命こいだ。ごはんの後，桑をカマスに堅く詰め，牛に積んで家へ運んだ」（鳩谷・中脇氏）など遠隔地へ出かけての桑摘みや運搬などの苦労話は多い。

b）焼畑の作物

白川村で焼畑が拡大しつつあった明治3年に栽培されていた主要農産物の生産状況を，斐太後風土記の数値をもとにみてみよう。

ヒエの生産が群を抜いて多く902石であり，2番目の米の366石の約2.5倍であった。大豆は151石，大麦78石，アワ38石，小豆27，ソバ15石と続いた。他に小麦，キビ，カブラも栽培されていた。桑の生産も多く9万2090貫もの生産をしていた。順次みてみよう。

ヒエは撞き減りが多く30%程度しか残らないうえに，あまりうまくないという欠点をもつ。白川村でよく栽培されているのは，アワよりも耐寒性があって冷害に強いという利点の他に，炊いた時に量が増え，また食べた時に満腹感を満たすからでもある。撞き減りの多いヒエはヒエの実を包んでいる皮も粉にして食べている。

ヒエは村内の全集落で栽培されているが，生産の多いのは飯島の150石，長瀬128石で他集落に比べ群を抜いている。村内1戸あたりの生産は3.4石であるが，米の生産の少ない南部の中切地区や北部の山家地区では1戸あたり8～9石と生産が多かった。

アワは村内23集落の3分の2にあたる14集落で栽培している。アワは雑穀の中では最も味が良いが，炊いた時に量が増えないのであまり作られなかった。　ソバの栽培は少なく，村内中央部の大郷地区を中心に僅か6集落で植えられているにすぎない。

重要な調味料である味噌やたまりの原料となる大豆はほとんどの集落で栽培されているが，1戸あたりの生産高は0.5石と少ない。

6．まとめ

現在，白川村では焼畑はなされていない。かつては村の農業の重要な地位を占めていた焼畑は忘れ去られつつある。若い世代にはナギという言葉すら知らない人達が多い。

隣接の石川県の白峰村では，焼畑を中心とした博物館的施設があって，様々な資料の展示がなされ，今は見ることの少なくなった焼畑での栽培作物が実際に植えられたりしている。白川村にも「白川郷合掌村」があり，種々の民俗資料を展示しているが，焼畑を中心とした博物館的施設が欲しい。また小規模でもよいから長野県北端の秋山郷のように実際に焼畑を実施すれば，合掌造り民家群を中心に観光地化が進んでいる白川村にとって新しい観光資源ともなりうるのではないだろうか。

〈あとがき〉

この小論は昭和62年に文化庁の依頼を受けて調査した「白山東麓の焼畑習俗」の報告の一部に加筆したものである。聞きとり調査等に協力していただいた白川村および，白川村役場の多くの方々に厚くお礼申し上げます。また，小論掲載の便宜を賜った岐阜経済大学地域経済研究所に対し，深い謝意を表します。

1　明治3年に飛騨国内各村々より報告された資料をもとに富田禮彦が編纂したもので，同6年に完成している。

2　溝口常俊「焼畑村落の展開過程に関する歴史地理学的研究　――　飛騨白川郷を例にして　――，人文地理38－2，1986，8～12頁を要約，一部筆者加筆。

3　前掲論文(2)，13～15頁の分布図と表をもとに要約，一部筆者加筆。

4　前掲論文(2)，24頁

5　前掲論文(1)，241～242頁

6　野本寛一「焼畑民俗文化論」，雄山閣，1984，248～249頁

聞き取り者氏名（五十音順）

新谷忠孝（大正元年生，76才）	高山市森下町（白川村木谷出身）
大戸継盛（明治42年生，79才）	白川村御母衣字上洞
大洞武夫（明治43年生，78才）	白川村萩町字戸ヶ野
坂下なみ（明治44年生，77才）	白川村木谷
坂次仙蔵（　　92才）	白川村平瀬

田中泰助（大正3年生，74才）　白川村牧（御母衣に住む）
中森由雄（昭和18年生，45才）　白川村保木脇
中脇美栄（明治38年生，82才）　白川村鳩谷
宮脇治信（昭和6年生，56才）　白川村飯島
山腰広雄（昭和9年生，53才）　白川村平瀬

（聞き取りは昭和62年7月～63年1月にかけて実施した）

（岐阜県立高山高等学校教諭）